

K-436

米沢市文化財調査報告書

米沢平野農業水利事業
普門院遺跡外3遺跡発堀調査概報

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-0000-468-01

昭和49年12月

米沢市教育委員会
東北農政局米沢平野水利事業所



山形県教育厅文化課

遺跡全景及びトレンチ状況



香門院遺跡全景（南方より）



同遺跡トレンチ



赤城才豆遺跡全景（北東より）



同遺跡Aトレンチ



孫遺跡全景（南東より）



同遺跡中心部発掘全景

窪遺跡出土土器



5区第3層出土状況



3区第6層出土



5区第4層出土状況



7区第6層出土



5区第5層出土状況



5区第4層出土

窪遺跡遺構(1)



2号住跡付近の配石遺構



同上出土石棒



配石遺構(右上)と4号炉跡の一部(左下)



4号炉隣接の埋蔵



13号ピット(中央)内部石組

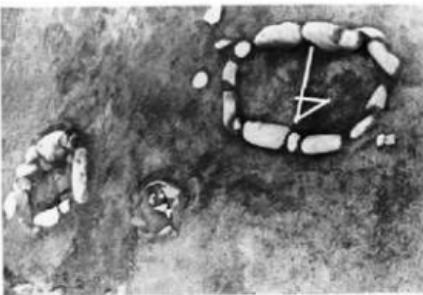


11号ピット(左)と埋蔵(右)

窪遺跡遺構(2)



3号炉跡



1号炉跡(右)と2号炉跡(左)



5号炉跡



4号炉跡



7号炉跡



6号炉抜き取り跡

序

最近、東北地方における開発が活発になり、ダムや高速道路や新幹線あるいは工場用地の造成工事等が急テンポですすめられております。このこと 자체は、これから郷土發展のために大きな光明であり喜ばしいことですが、ただそれと同時にこの山紫水明の郷土の自然環境を保全し、貴重な文化財を失わないようにしていかなければなりません。それが現代人に課せられた責任であると思います。

文化財は歴史資料としての価値ばかりでなく今私たちが失いかけている素朴な人間性を回復し、豊かな心をとりもどす上からかけがえのない文化遺産でもあります。

たゆまざる勤勉によつて経済大国を果たし得た私達日本人は、今こそ、すぐれたその英知によつて精神大国をめざすべきであり、その意味から文化財を大事にする思想を自らの手で育てていかなければならないと考えます。

当教育委員会は、本年7月以来、水築ダム造成による灌漑用水路としての西幹線水路工事にかかる埋蔵文化財の発掘調査を行ないその記録保存を行なつております。

本年度は普門院外三遺跡の発掘調査を実施しその資料は、現在「置賜考古学会」にお願いして整理をしているところですが、本報告書が出されるまで若干時間を要しますので、当面、本年度の調査の成果を一般に中間公開し、ご活用を頂くため、本年度の事業報告を兼ね、この「概報」を刊行いたします。

ここに至るまでに、調査に格別のご協力とご指導を頂いた東北農政局米沢平野農業水利課の方々、並びに置賜考古学会々員の方々、そして地元市民の皆様方に心から感謝申し上げます。

昭和49年12月

米沢市教育長 横山一郎

2	赤崩才豆	米沢市大字 間根字赤崩	昭和14年 8/8 ~ 8/10 8/15 (4日間)	34	土器片、石器剝 片 小ビット	調査員 橋爪 健 南原 親明 西陽考古学会员 間根 南原地区有志
3	窪	米沢市大字 窪字八ヶ代	同年 7/25 ~ 7/7 8/16 ~ 8/10 (42日間)	706	住居跡 8軒(推定) 灰跡 6 ビット 15 土器りんご箱 石器 9 土製品 石製品 炭化物・生糞土 骨片(数枚)	調査員 橋爪 健 手塚 純 南原 親明 西陽考古学会员 間根 南原地区有志 米沢女子高校社会クラブ 南原中学校生徒
4	釜野	米沢市大字 釜野	同年 8/15 ~ 8/16 (2日間)	16		調査員 橋爪 健 南原地区有志

總発掘面積は約 1,000 m²で、当初予定の 3 分の 1 にも充たなかつたが、これは調査途上、南原の窪遺跡は予想外に重要遺跡であることが判明し、限られた期間と労力から調査の大半を窪遺跡に集中精査していただきでもあつた。

調査の結果、普門院と赤崩才豆の両遺跡では、少量だが縄文晚期土器片の発見により、両遺跡の範囲が確認され、南原の窪遺跡からは県内でも貴重な馬蹄形石組炉及び複式炉を伴なつた住居跡群を中心に、多量の土器片や石器、追構などが検出された。これらの遺構や遺物から窪遺跡は縄文中期後半（約 4,000 年前）の集落跡として、幹線水路を中心に広がる重要な遺跡であることが判明した。

以下各遺跡の調査概要を略報し、詳細については昭和 50 年度の調査終了後にまとめて報告書を作成したい。

II 各遺跡の概要

1) 普門院遺跡

1) 遺跡の立地

奥羽本線関根駅の南西 200 m、柳山の北山麓に位置し、北東に張り出した舌状台地及び大久保沢から流れる旧河川によって形成された西岸の小段丘上に立地する。（第 2 図）

標高は 315 m ～ 325 m で東に微傾斜をなし、旧河川（現在水田）よりの比高は段丘面で 4.5 m、台地上で 4 ～ 5 m を計る。

2) 調査方法

遺跡附近の表面採集の後、台地上には 1 × 50 m の A トレンチを水路中心に 1 本、A トレンチの北側に 2 × 4 m の試掘溝を 3ヶ所設定、小段丘面には 2 × 4 m の試掘溝を東西両端に各 1ヶ所（B 区 1, 2）旧河川東に張り出した台地上に 2 × 4 m の試掘溝を東西両端に各 1ヶ所（C 区 1, 2）を設定して発掘を行なつた。

3) 層位

台地上の A, C トレンチでは第 1 層黒褐色表土（20 ～ 30 cm）、第 2 層暗褐色 サ質シルト（20 ～ 30 cm）、第 3 層黄褐色 サ質粘土シルト（10 ～ 20 cm）を基本とし、地表下 60 ～ 70 cm 付近で第 4 層の黄褐色 サ質疊層となる。第 2 層は発達していた小段丘面の B トレンチでは、第 1 層黒褐色表土及び第 2 層暗褐色 サ質シルトが束縛（B-2）で 70 ～ 80 cm、西端（B-1）で 90 ～ 100 cm 程積し、その下層は第 3 層黄褐色 サ質疊層となる。

4) 遺構

A, B, C トレンチでは、いずれも確認出来なかつた。

5) 遺物

小段丘面の西（B-1 区）及び東端（B-2 区）試掘溝の第 2 層（暗褐色 サ質シルト）下部より縄文晚期土器片と石器剝片などが小量

検出された。

6) まとめ

遺物は小段丘面でわずか検出されたのみで、当初予想した普門院裏の台地上（水路予定地内）では、全く確認出来なかつた。従つて、普門院遺跡の中心部は水路北東の微傾斜地に広がつていることが予測された。ただし、縦文晚期における生活の範囲は台地下の段丘上にも一部及んでいたことも十分推測され、水路にかかる部分はこの段丘面だけであつた。

2 赤崩才豆遺跡

1) 遺跡の立地

松川上流の東赤崩橋の南東 $400m$ 、赤崩山の西山麓に位置し、柳沢と紫の沢の間に北西にのびる丘陵先端に立地している。標高は 310 ～ $315m$ 、遺跡西側道路との比高は $2\sim 3m$ 、この道路付近は旧松川によつて形成された段丘上にもあたつている。

2) 調査方法

丘陵台地の東西は既に工事用道路で破壊され、調査は不可能であつた。従つて残された台地上の水路中心に並行して、3本のトレンチを設定して調査を開始した。各トレンチの大きさは、Aトレンチ（水路中心部） $2\times 10m$ 、Bトレンチ $2\times 5m$ 、Cトレンチ $2\times 8m$ で、B、Cトレンチは遺構確認のために後に拡張した部分である。（第3図）

3) 扇位

トレンチ内の基本層序は、第1層黒褐色表土（ $30\sim 40cm$ ）、第2層暗褐色砂質粘土シルト（ $20\sim 50cm$ ）、第3層黄褐色粘土シルト（地表下 $80\sim 100cm$ ）で地山となり、西側ほど各層の堆積が厚くなる。また、第1層と第2層の間には $10cm$ 前後の厚さで間隔（砂礫層）が認められ、土砂流出の痕跡も伺われた。

4) 遺構

住居跡に伴なう柱根跡と思われるビット（径 $20\sim 50cm$ ）がAトレンチ内で7ヶ所、Bトレンチで1ヶ所、Cトレンチより2ヶ所検出されたが、周溝、壁、伊跡等の他の遺構は全く検出できなかつた。

5) 遺物

縦文晚期の土器片少量（ボリ袋1ヶ分）と石器剝片数点程度で遺物は微量である。

6) まとめ

土器群やビットの存在から小集落の住居跡が存在したこと推察され、この遺跡の中心部はほぼ水路予定地内にあつたと思われる。しかし、東西の調査は不可能であり、遺跡としての存在価値はすでに失なわれていた。

3 瘤遺跡

1) 遺跡の立地

遺跡は、県道米沢猪苗代線から大平に分岐する八カ代の南方 $250m$ の地点に位置し、 $30.6\sim 30.8m$ の標高にある。

遺跡付近は盆地東端を北流する松川が形成した南原扇状地扇央の西端にも位置し、東より西に微傾斜をなし、また李山市~~市~~方面からの流出によつて形成されたゆるやかな扇状地地形の先端部とも複合して複雑な堆積地形を形成している。遺跡はその上に立地しているといえよう。

また、遺跡の西側には、西方の岩野山東山麓に形成された傾斜地と松川市~~市~~よりの堆積地形との間に形成された凹地がみられ、この凹地が掘立川の上流にもなつてゐる。（第4図）

2) 調査方法

すでに掘立川西北と迫跡の東方では水路の掘削工事が開始されてお

り、東西の地層確認後、水路中心に沿つて包含層確認のトレンチ6本と地層確認のグリットを5ヶ所設定して調査を開始し、更に遺構や遺物の確認地点を中心可能な範囲で拡張精査することにした。

トレンチの大きさは、県道西側の水路中心に第1号トレンチ($1 \times 100\text{m}$)と第2号トレンチ($1 \times 10\text{m}$)、道路東側に第3号トレンチ($1 \times 20\text{m}$)を東西に設定、更に第1号トレンチ東端に第4号トレンチ($1 \times 5\text{m}$)、ほぼ中央に第5号トレンチ($1 \times 5\text{m}$)、西端に第6号トレンチを各南北に設定し、水路中心の南側、東西約200mの区間に 2m^2 のグリットを5ヶ所設定して層位確認を併行して実施した。

後に遺構確認地域を拡張したが、ここでは拡張の順に1～7区の名前を用いることにする。(第5図)

3) 層位

層位は地表下1m前後までは黒褐色、暗褐色、暗黒色の砂質粘土シルトが地城毎に複雑に堆積し、黄褐色砂礫層に推移するが、基本的に第1層(黒褐色表土 $2.0 \sim 3.0\text{cm}$)、第2層(暗褐色砂質粘土シルト $1.0 \sim 1.5\text{cm}$)、第3層(褐色砂質シルト $1.5 \sim 2.0\text{cm}$)、第4層(黒褐色砂質シルト $2.0 \sim 2.5\text{cm}$)、第5層(黒褐色粘土質シルト $1.0 \sim 1.5\text{cm}$)、第6層(黄褐色粘土質シルト $1.0 \sim 1.5\text{cm}$)の層位を示し、その下部には第7層(明黄褐色砂礫層 $3.0 \sim 5.0\text{cm}$)が帶状に堆積し、更にその下部は黄褐色粘土質の地山を形成している。

この第7層の砂礫層は、東より西に行くに従つて地表からのレベルが深く、道路東側では約 1.00cm 、西側遺跡中心部で約 1.50cm 、西端では約 1.80cm のレベルを示している。

また、道路西側の遺跡付近では、第3層上部に $5 \sim 10\text{cm}$ の厚さで砂礫の間層が多くみられる。特に標高 302.5m より 302.0m に推移する付近ではこの砂礫の堆積層が厚くなっている。

さらに、遺跡西端の第7層付近には湧水地点もみられ、層状地帶の伏流帯の形成も伺われた。

4) 遺構

遺構としては、推定住居跡8軒、石組炉2、馬蹄形石圓炉3、土器埋設石組復式炉2、土壙15、配石遺構などを検出している。

以下、住居跡を中心に概要を略述する。

① 第1号住居跡(第6図)

第2区第5層で、柱穴と思われる小ビット9個、石組炉2個、埋甃1個を伴なう住居跡遺構を確認した。

炉は8個の自然石を橢円形に組みあわせてあり、長軸 9.0cm 、短軸 6.0cm 、長軸は北東～南西を指していた。(1号炉跡)。炉内部には木炭混入の焼土が 5cm 堆積していた。

1号炉の北東 $\pm 0\text{cm}$ の位置に、もう1つのほぼ橢円形プランの石組遺構が検出された。12個の自然石を組みあわせ、菱形土器脚部を裏面にして敷き並べられていた。内部に焼土、木炭は検出できなかつたが、炉跡と推定される。(2号炉跡)。

また、1号炉の北側に隣接して菱形土器が縦位に1個埋設されており、周辺には広く木炭、焼土が確認された。焼木の一部が残存した痕跡もあり、床面一帯に木炭は広がつていた。

周溝や壁は検出できなかつたので住居の平面プランは明らかでない。

② 第2号住居跡(第9図)

第3区第6層で検出した石圓炉に伴なう推定住居跡である。炉の形態は馬蹄形をなし、長軸 18.0cm 、短軸中央で 10.0cm 、長軸方向は南～北を指す。炉は大小の自然石で二段にしきられ、中央下部には少量の焼土がある。(第3号炉跡)

周囲の拡張が困難だったので、柱穴、周溝、壁等の検出も出来ず

住居の平面プランは明らかでない。

③ 第3号住居跡（第7図）

第5区第4層で細い柱穴と思われる小ビット24個、棒円形プランのビット1個北東部と南部で埋葬が各1ヶ検出された。埋葬の近くには木炭屑の堆積もあり、土器には赤く焼けた痕跡もある。

拡張範囲内では一部床面を検出したのみで塗や周溝は確認できなかつた。住居の平面プランは明らかでない。

④ 第4号住居跡（第8図）

第5号住居跡の北東部に隣接して第4層下部より大型の土器埋設石組複式炉が発見された。（第4号炉跡）この炉に伴なう推定住居跡である。水路範囲より若干外れたので拡張せずに石組はそのまま埋め戻して保存してある。したがつて住居の平面プランはわからない。

炉は、土器埋設石組部、敷石石組部、馬蹄形の石組部からなり、大きさは長軸280cm、短軸中央で180cm、長軸方向は南一北を指す。石組部の埋設土器は1個であるが、敷石石組部の南西外側に隣接して、もう1つの整形土器が埋設されており、土器の北側に密着するように8個の季大の自然石を舟底型に組みあわせてあつた。

これら二つの埋設土器の周囲10cm付近まで焼土があり、土器も火熱を受けた痕跡が認められる。

また、敷石石組部の南西側にあるべき大型の石が一部取り除かれた形跡も確認された。

⑤ 第5号住居跡

第5区第6層で検出されたもので、第4号住居跡の北側約20cm下層にある。周溝の痕跡が一部に残っているが柵は確認できなかつた。住居は経よ5mのほぼ円形に近い棒円形プランと推定される。

柱穴はかなり重複していたが、主柱は6本と推定される。

住居内のやや北寄りに石組の複式炉がある（第5号炉跡）。炉は、土器埋設石組部、敷石石組部とからなり、下部を欠く整形土器が二つ埋

設されている。

炉の大きさは長軸130cm、短軸120cm、長軸方向は北西—南東を指す。埋設土器の周囲には5～10cmの焼土が堆積しており、石組部と土器は赤く焼けた火熱を受けた痕跡がある。口経32cmの大型整形土器の方は、下部に4個の河原石が置かれてあり、その上に支えられている。

炉の北東部に隣接して、経100cm、深さ40cmのほぼ円形の袋状ビットが設けられており、ビットの底部より土器片とクルミの炭化物が検出された。さらにこの住居跡には増改築が行なわれた形跡も伺われ、南西部は第7号住居跡とも重複している。

⑥ 第6号住居跡

第7区第7層で5号住居跡の西側に隣接して検出されたものである。壁は確認出来なかつたが、南西部に周溝の一部が残つている。この周溝部は第8号住居跡とも重複している。

柱穴と思われるビットは10箇所で検出されたが、主柱は4本かと推定される。しかし、住居の南側半分は他の住居跡と複雑に切りあつて重複しており、住居のプランは明らかではない。増改築の形跡も推定される。炉跡の形態は明らかでないが、住居のやや南寄りに130cmの赤く焼けた焼土が5～8cm堆積している部分が検出された（6号炉跡）。焼土には多数の石を抜き取った痕跡があり、少くなくとも1、2回は炉を作り変えたと推定される形跡もある。

炉跡の北西に隣接して経75cm、深さ35cmのほぼ円形の袋状ビットがある。ビットの側板と底部には河原石が嵌め込まれている。内部からは数片の土器片が検出された。

⑦ 第7号住居跡

第7区第7層で検出した馬蹄形石組炉（第7号炉跡）を伴なう住居跡である。第5、6、8号住居跡と重複して、住居の平面プランは明らか

でない。床面は炉の周辺でわずかに確認され、黒褐色砂質粘土にわずか木炭を混入して踏み、かためられていた。柱穴は周囲の住居とも複雑に入り組み支柱プランは明確でない。炉跡は、第3号炉とはほぼ同形態で馬蹄形をなすが、先端の右側部には、梢円形と副丸方形の扁平な河原石が散かれてあり、木炭が4~5cm堆積していた。

炉の大きさは長軸180cm、短軸110cm、長軸方向は南一北を指している。炉内部は5号と同様に自然石で二段にしきられている。

炉の北東に長軸130cm、短軸80cm、深さ25cmの不整形のビットが掘り込まれており、内部より土器片と骨片を少量検出している。

⑤ 第8号住居跡

第7区の南西端第6階で検出した推定住居跡である。北東部で7号住居跡を切り込んでおり、周溝の一部が残っていた。発掘区域の制限から住居の平面プラン及び炉の形態は不明である。北東部には、胴下半を欠く菱形土器が縦位に埋設されており、東側には木炭混入の焼土が1m²ほど広がっていた。埋葬の西側に隣接して長方形のビット(長軸70cm、短軸50cm、深さ45cm)とその北側に縦110cm、深さ40cmのほぼ円形の袋状ビットが検出された。後者のビット底部には大小の河原石が散き並べられ、内部からは若干の土器片が検出された。

⑥ 土 墓

各住居跡、内外より検出された土壙の総数は15ヶ所であるが、その規模、特徴などを要約すると次のようになる。

ビット番	住居跡	形態	大きさ(cm)	深さ(床面)	特徴・方位
1	第1区北東部	長方形	140×80	110 (地表)	長軸南北 底部に礫
2	5号住居跡	梢円形	90×70	24 (床面)	長軸北東-南西
3	5号	円形(袋状)	100×90(上部) 115×105(底部)	40	炉東に隣接 クバニ炭火物 底 部に礫
4	"	長梢円形	160×70	75	住居跡北東に隣接 長軸南北
5	"	梢円形	110×70	60	住居跡北北東 長軸南東-北西
6	"	円形	98×95	15	住居跡南西
7	7号住居跡	円形	55×50	40	炉の北東に隣接 土器片
8	6号	副丸方形	100×90	65	住居跡北端 底部に礫
9	"	不規則円形?	120×?	75	住居跡北端 側面に礫
10	"	円形(袋状)	80×72(上部) 85×80(底部)	38	側面 底に礫 土器片、骨片(?)
11	8号	長方形	70×50	45	長軸南北
12	"	円形(袋状)	115×105(上部) 130×115(底部)	40	底部に礫と骨
13	"	円形(袋状)	100×90(上部) 105×100(底部)	38	12号ビットの北側 に隣接 底部に礫18ヶ
14	7号	副丸三角形	65×65	42	炉の南側東 木炭、骨片
15	6号	円形(袋状)	45×45(上部) 50×48(底部)	25	土器片

5.) 遺物

本遺跡から出土した遺物には、土製品として各種土器、有孔舟形土製品(仮称)、石製品として石錐、石錐、石ヒ、磨製石片、各種スクレイパー、凹石、磨石、石皿、石棒、管玉等がある。その他クルミの炭化物、良質粘土、骨片、木炭なども少量検出している。

現在、これらの遺物は整理途上にあるため、量的関係や遺物の特徴性について明確にできないが、遺物の中でも最も多いのは土器である。土器片だけでも復原可能なものの12個体分を加えて、リンゴ箱に1.5箱余りはある。また、石製品では凹石や磨石などは比較的多いが、石錐、石錐など石器類はきわめて少くない。

土器は器形として圓形、深鉢形のものが多く、ヤヤリバー形も目だつている。他にも浅鉢などもあるが一般に小型のものは少ない。焼成は一般に良好で0.5~1cmの器厚をなす精良土器が多く、器厚1~1.5cmを有する粗劣な器も混入する。口縁部は、平縁が多いが波状口縁も目だつている。

口縁へ口縁にかけて内反するもの、外反するもの、垂直するものなど多様であるが、口縁把手を有するものはきわめて少くない。底部は知見する範囲では、すべて平底であるが、発掘された土器の量に比較してきわめて少くなかった。

文様表出の特徴としては、縄文帯と肩縄縄文帯を基調とし、渦巻状、縦状、横円、逆リ字状などの沈線によって縄文帯を区画する施文法の土器群が大半を占めている。その他粘土紐貼付による渦巻状、波状、縦状の隆起線文を施したもの。ヘラ状工具による条線文や羽状の刻目文、刺突文を施したものなども目だつている。さらに、口縁部と脚部の文様帶が分離されているものとそうでないもの文様構成の上でも若干の年代の推移を思わせるものもある。

これらの土器の文様構成、表出技法、器形などの諸特徴から、時期的には縄文中期後半すなわち大木8.0~大木1.0式に併行する土器群と一

致し、縄文中期後葉の編年研究に好資料を提供しているが、今後の整理分類を待つて後日の報告書で検討してゆきたい。

6.) まとめ

雍遺跡は縄文中期後半の集落跡としてきわめて重要な遺跡であることがわかつた。すなわち、今回の約300m²の発掘区域からだけでも多量の土製品、石製品とともに8軒の住居跡が重複して検出され、しかも梢円形石組炉、馬蹄形石圍炉、土器埋設石組復式炉など、炉跡形態の変遷を示す貴重な炉跡遺構と各種土塙が隣接してまとまつて検出されたことは、学問的にも貴重な資料を提供してくれた遺跡であり、予想外の成果が得られたといえよう。

この重要遺跡の範囲は道路(大平線)東側は含まれていない。主として道路西側の幹線水路に包含され、水路センター及びその南側に遺跡の中心があたつていた。また、住居跡の広がりや遺物発見地点などから予想するにこの度の発掘区域の更に南側にも延びている可能性が強い。

4 筝野遺跡予備調査

篠山東山麓には、篠野断層によつて形成された小丘陵状の山地が豊富しており、平野部に続く傾斜変換線付近の台地上から、石器、土器片などが発見されていた地域も少くなかつた。昭和38年に篠野部落の南西約1.00mの地点を山形大学教授柏倉亮吉氏が発掘調査をなされた折、縄文後期の住居跡が発見されていたが、この度の調査地点は、この遺跡の更に5.00m南の舌状台地上である。幹線水路中心に沿つて2×2m試掘溝を4ヶ所設定して試掘し、更に付近の表探査を行なつたが、遺構や遺物は発見出来なかつた。山麓台地付近の標高は280~300mである。

日程や人的制約により未調査の地点も残つているが、地形の立地条件、試掘溝の土層から推察するに、水路範囲の東側に包含層が発見される可能性が強い。未調査区間については来年度早々に確認して行きたい。

Ⅱ 総 括

以上各遺跡の調査の概要を述べてきたが、最後に今回の調査成果を総括し、若干の今後検討すべき問題を列挙しておきたい。

1 遺跡の範囲

49年度西幹線水路調査区域にかかる遺跡の範囲はほぼ次の通りである。

- ① 普門院裏の台地東側小段丘上約150m²の範囲
- ② 赤崩才豆板ノ上の道路東側台地上約100m²の範囲
- ③ 南原宿遺跡は県道米沢へ大平線より西側獨立川上流まで約1000m²の範囲

特に③については、更に南側に広がっている可能性もあり、現状保存の必要性が認められる。

2 遺 物

今回の発掘遺物総量、リンゴ箱15箱は下らないが、大半が縄遺跡の縄文中期後半（大木8号～大木10号）の土器である。

これらの土器の出土状況を大別すると、

- ① 表採又は第一層表土中より発見したもの、② 試掘溝より発見したもの、③ 住居床面の上層より発見したもの、④ 住居床面の埋土中より発見したもの、⑤ 住居床面に埋設されて発見したもの、
⑥ 炉跡に伴なつて発見された埋設土器、⑦ 住居跡内のビットより発見されたものなどがある。

この中で④～⑦は住居跡及び炉変遷の前後関係を検討するに重要な資料となる。今後の整理分類を待つて縄文中期後半の編年や文化の交易圈の諸問題とあわせて検討を要する。

また、石製品では凹石、磨石以外の利器がきわめて少くないが、生活環境や生活手段の問題ともあわせて検討を要する。

3 住居跡遺構

住居跡は、赤崩才豆遺跡で1ヶ所、縄遺跡で8軒を推定しているが、中でも縄遺跡の第3号～第8号の住居跡は、相互に切りあい重複しており、増改築が行なわれたことも予想され、開通炉跡や遺物の整理分類を待つて、住居プランの進移と新旧関係、更には集落構成の諸問題ともあわせて、今後検討してみる必要があろう。

4 炉跡遺構（第9図）

炉跡形態として、第1号、第2号の楕円形プランの右組炉、第3号、4号、7号の馬蹄形プランの右組炉、第4号、5号の土器埋設石組複式炉などが検出されたが、それぞれの構造プランには若干の違いを示している。第4号は明らかに炉を作りかえた痕跡もあり、第6号の抜き取り跡にもその痕跡が認められる。縄文中期後半に於ける炉跡形態変遷の研究に好資料を呈示しており、十分吟味すべき問題である。

5 ビット、その他

宿遺跡から発見された土器は、前記の如く15ヶ所を数える。その中で、住居跡の付近より検出されたもの7ヶ所、住居跡内より検出されたもの7ヶ所で、プランとしては円形が多く、他に楕円形、長方形などもある。円形プランの中で3号、10号、12号、13号、15号は袋状の側腹をなしている。また、この遺跡のビットの性格として、側腹と底部に河原石、礫などが挿入されているものが多い。炭化したクルミ（3号）や骨片（10号、14号）が検出されたビットもある。果たして埋葬施設なるものか、或いは貯藏関係の機能を有するもののかは、検討してみる必要があろう。

その他、第5区4層の第2号住居跡面で東南隅より検出された石椎を中心とする石組遺構、或いは5ヶ所で検出された埋設遺構の性格なども検討してみるべき一つの問題でもあろう。

むすび

西幹線水路にかかる発掘調査に着手したのは盛夏の頃であった。その後、遺跡は予想外の発展をなし、調査を終了したのは初秋の9月終り頃であつた。

この間、関係機関、地元の方々をはじめ福島考古学会々員、米沢女子高社会クラブ員など多くの人々の熱心な御協力によつて、予定の調査を終了し、この略報を出すまでに到りました。

この度の調査の中で、特に塙遺跡は遺構の保存もよくその変遷過程を示していることなど、東北地方の縄文中期後半の集落跡究明には、非常に重要な遺跡として注目すべきかと存じます。

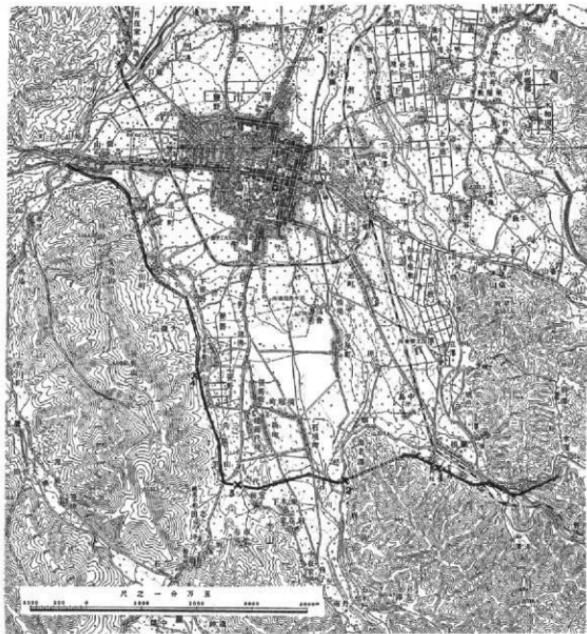
私共担当者として、このような予想もしなかつた重要な遺跡に不慣れな体制でとりくみ、多くの人々に御迷惑をおかけし、また満足されるような保存も出来ずに不十分な調査となつた点も多々あつたごと、深く反省している。

せめて、この度発掘した地域の南側に広がる遺跡については、現状のまま大切に保存して行きたいと思う。関係機関並びに地元の方々に特に御願いする次第です。

最後に、東北農政局をはじめ市関係の方々、また連日調査と写真に御協力いただいた和地博美、小林茂、両氏、地元有志の皆様方、調査の御助言をいただいた柏倉亮吉、加藤稔、佐藤静雄、佐藤庄一の各氏に厚く御礼申し上げます。

以上、本年度に於ける調査の概報を記し、なお明年度の調査終了後にまとめて本報告書を作成して行きたいと考えている。

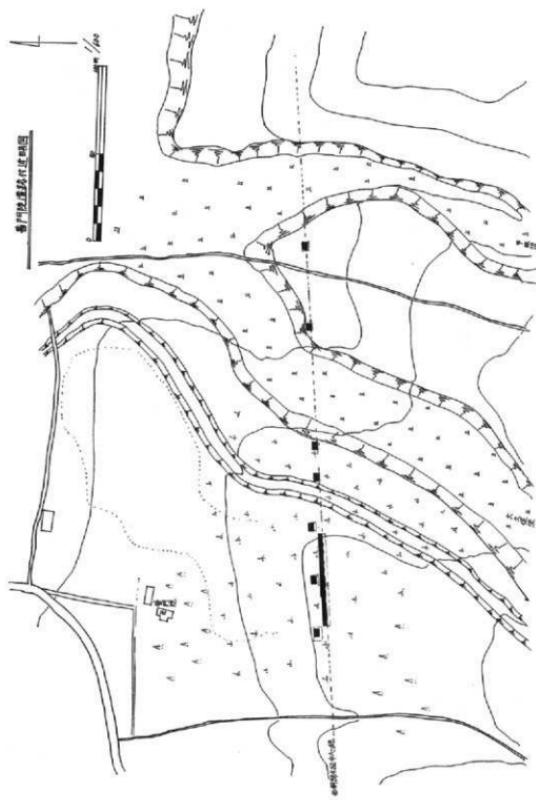
(文責 亀田晃明)



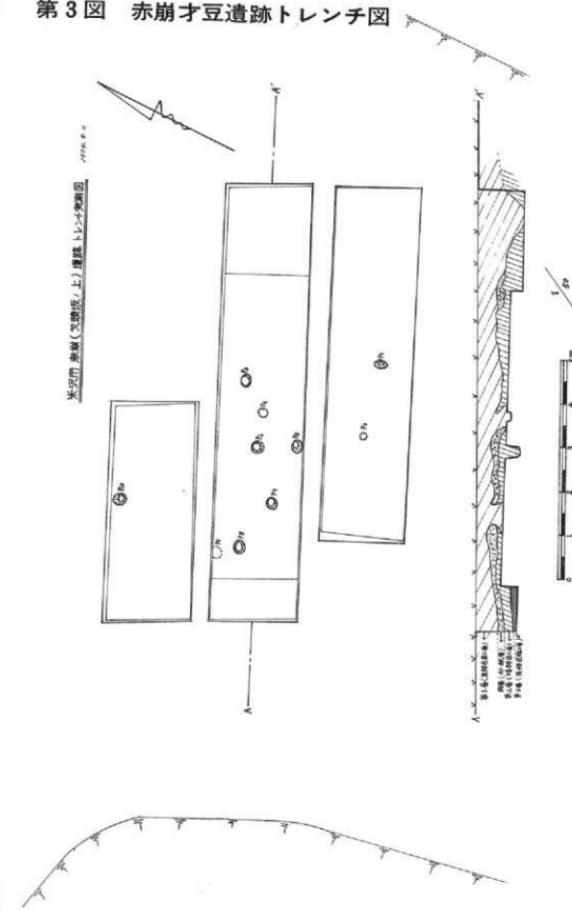
第1図 遺跡の位置

- X印
1. 善門塙遺跡
2. 春前才笠遺跡
3. 塙 遺跡
4. 笹野遺跡
— — —
西幹線水路

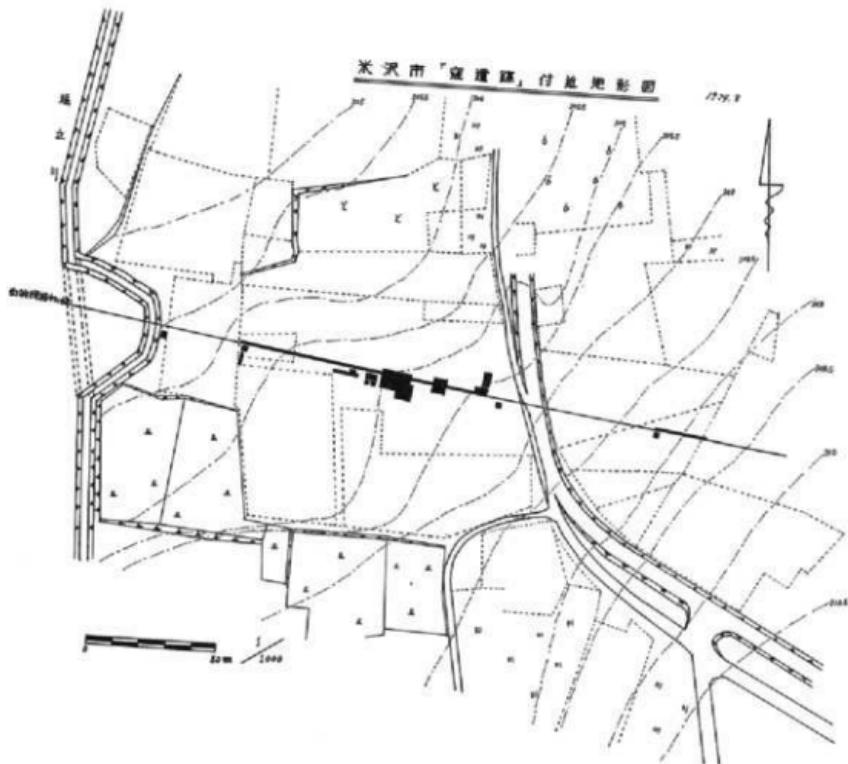
第2図 普門院遺跡付近略図



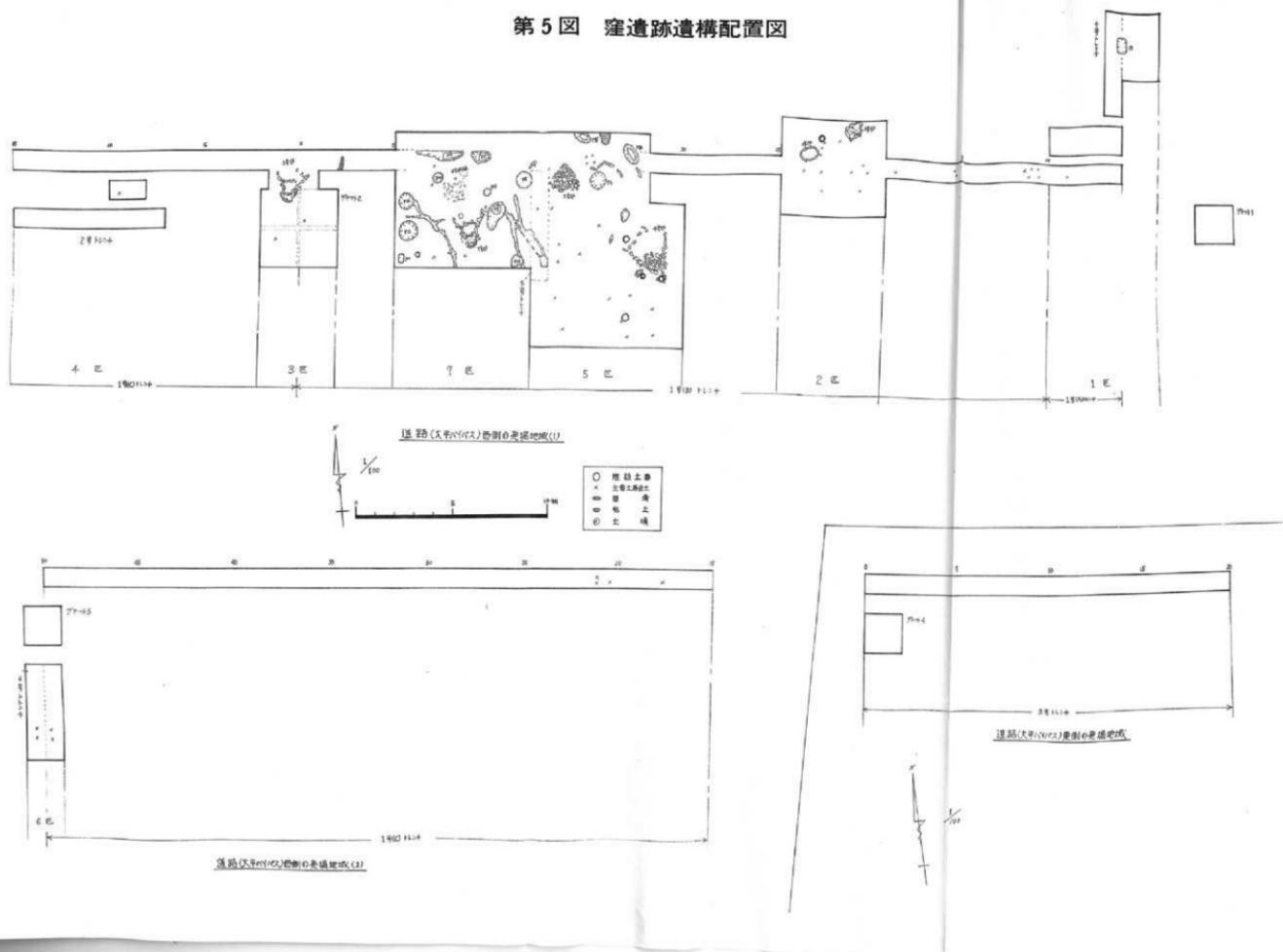
第3図 赤崩才豆遺跡トレンチ図



第4図 窪遺跡付近地形図

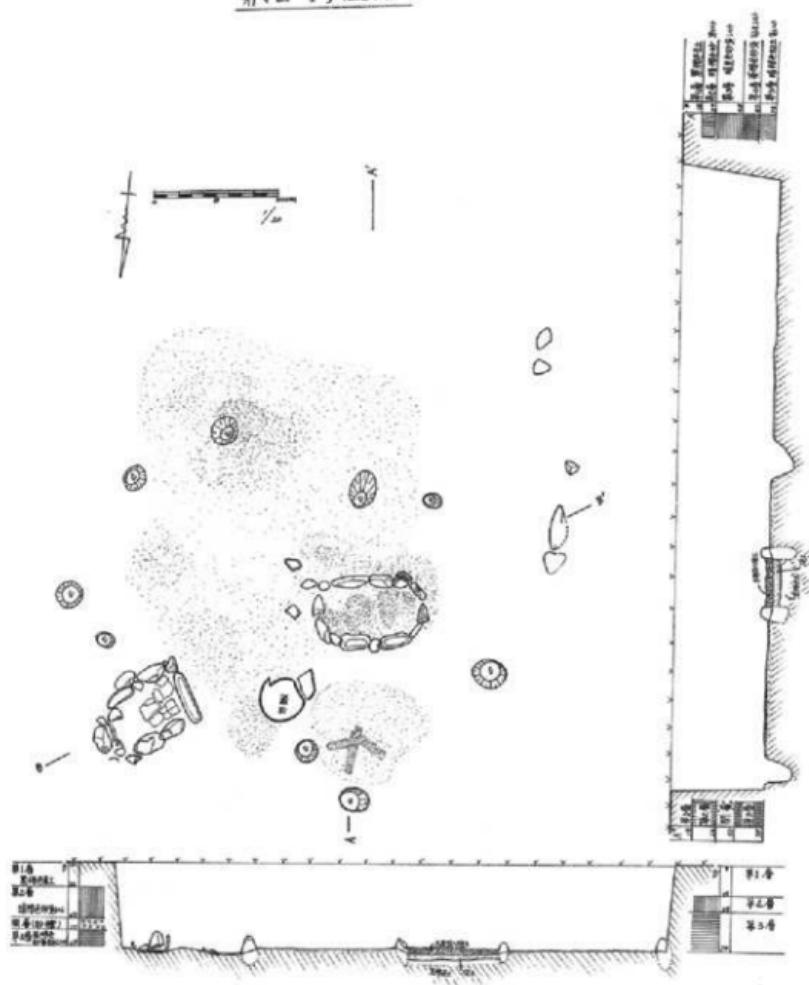


第5図 窪遺跡遺構配置図

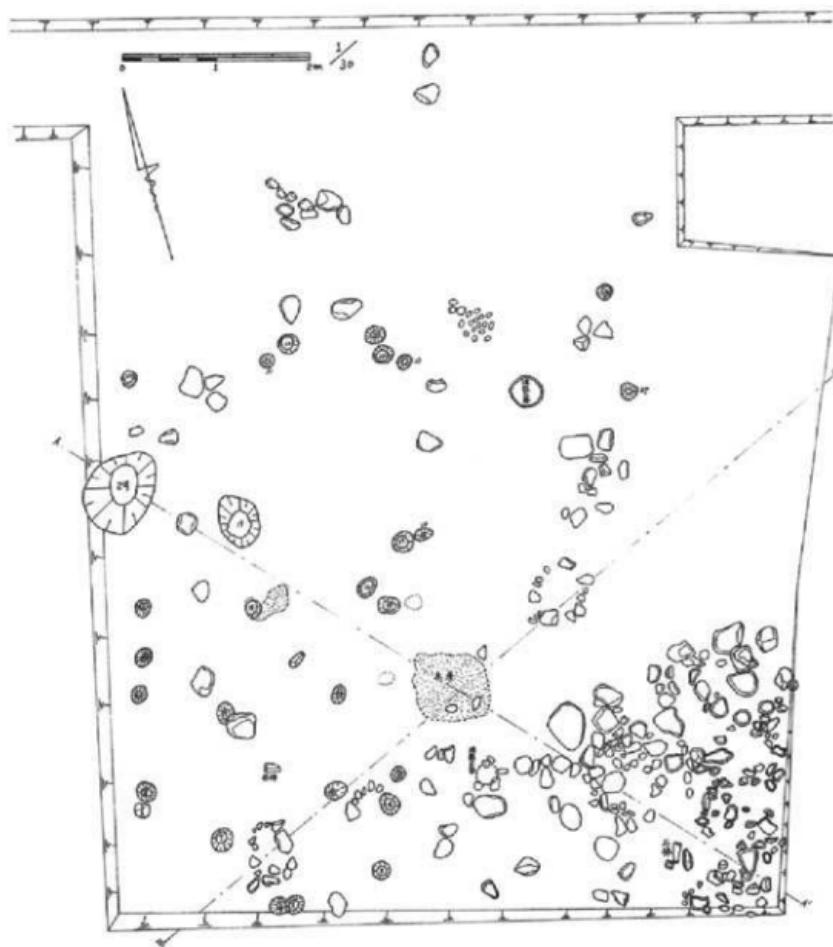


第6図 1号住居跡

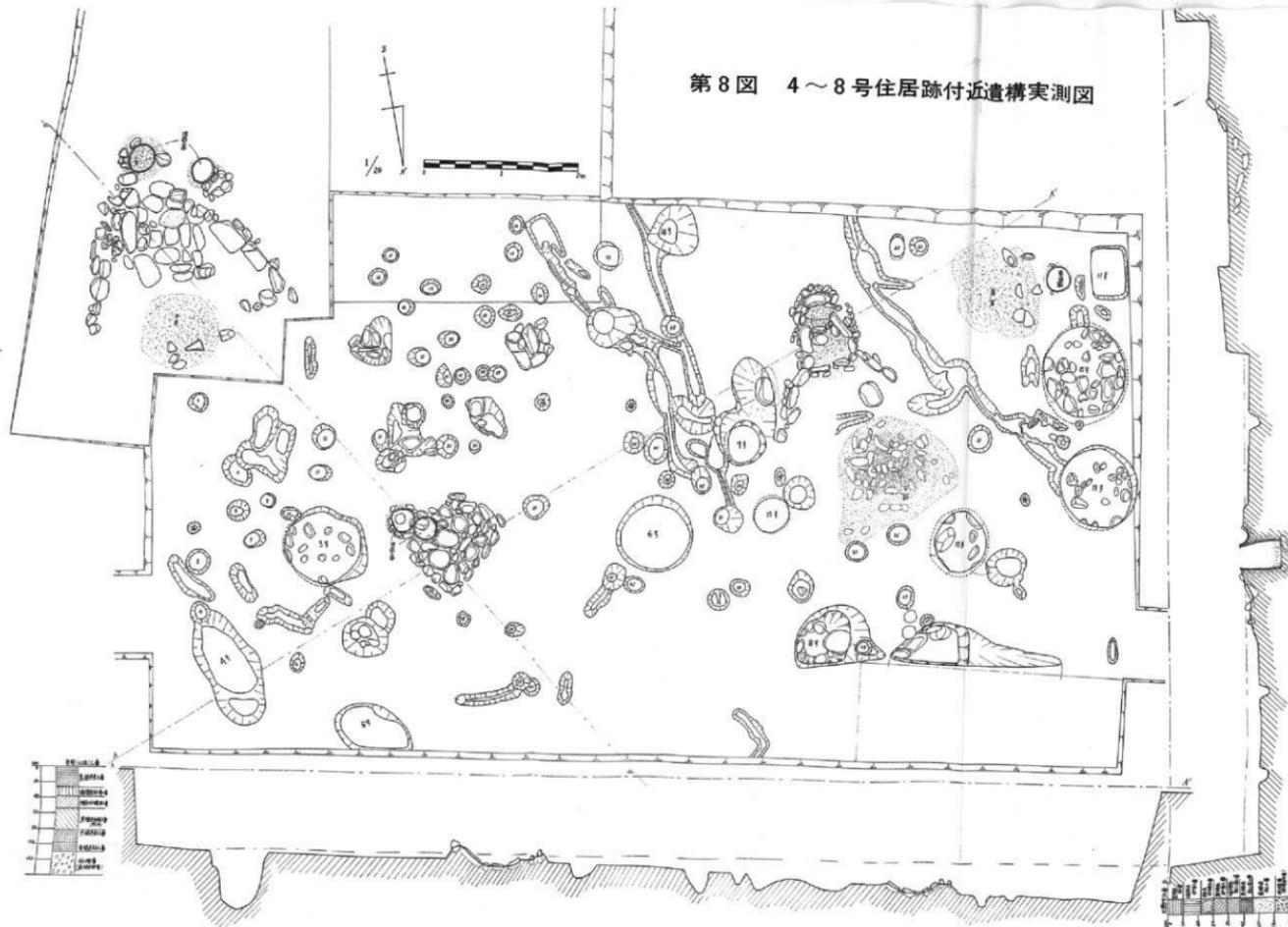
第6図 1号住居跡



第7図 3号住居跡付近遺構図



第8図 4～8号住居跡付近遺構実測図



第9図 炉跡実測図

